

ホトトギス

八月号

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別扱承認書第百六十七号
明治三十一年十月廿日第三種郵便物認可(毎月一冊一日発行)
平成二十年八月一日発行(第四百一十一号第八号)



俳句随想〔三三十四〕

汀子

若い世代の指導者を育てて行くのは急務である。とは思うが、世の中の急な変化に順応出来ない我々の世代を置いてきぼりにして一足飛びに変化していくのも問題が多い。

年齢には関わらずその人の持つている若さは一人一人差があるように思う。年寄り扱いされていると本当に年寄りになってしまふ。病気の人が回復して健康を取り戻すのは、病人扱いされなくなつた時であろう。

ある御夫婦を見ていると何か教えられるものがある。その御主人にはパーキンソンの症状が出ていたが転んでも転んでも自分で起き上がり、差し伸べた手を振り払い、手伝おうとする人を追っ払って自分で起き上がる。夫人は黙つて見ているだけである。その夫は毎月会う度に良くなつていくようにお見受けする。夫人に何故手伝わないのかと尋ねると、本人の希望だからと言つて黙つて静かに見ている。手伝わないのはとてもつらいと言われたことを人づてに知つた。病を克服しようと努力する夫を手を貸さないうで見守る我慢を知つて私は頭が下がつた。このところ恐ろしい自然災害が続いている。自然も病んでいるのだから。しかし自然の回復力を私達は素直に信じて、自然を傷めつけることだけを止め、自然が立ち直るのを見守ろうではないか。

旬日記 汀子

平成十九年八月一日 祝 鈴木一睡様句集

みちのくの春秋灯下親しみて
八月四日 悼 東野一彌先生

お人柄涼しき日々を偲ぶのみ
八月四日 野分会夏行

山霧の飛んで谷霧一枚に
青空の時々見せて山の秋

六甲の霧を傷ること勿れ
八月五日 野分会夏行

手違ひは霧に隠るほどのもの
この句会濟めば暑さの待つ下山

八月六日 ロイヤル俳壇
一つの荷下ろしたるよりの秋

拾ひたる山の病葉山の音
事運ぶとき心澄む夜の秋

計画の齟齬も受けとめ夜の秋
一枚の病葉の旅物語

八月六日 悼 原三猿子様
露消えて思ひ出ばかり残りけり

八月七日 大阪倶楽部
汗見せぬ和服を凛と着終へたる

欠けてゆく明るさも又盆の月
水に浮く花火屑にも名残あり

遊ぶ汗引きて働く汗となる
手花火に大人の時間ありにけり

手残せし仕事に向かふ晩夏かな

八月九日 清交社

七夕や届けられたる星座表
手作りの南瓜携へ来られけり

水引の赤の所在を野に置き
立秋というてぬしこともう忘れ

六甲の霧の去来に滞在す
八月十一日 下萌句会

朝に六甲の朝はじまりし
かなかに肅々と句碑披かる

流星は八月十三日未明
八月十四日 綿業倶楽部

夕風の朝のはじめたる残暑かな
快晴の朝のはじまる残暑かな

着迷うて心添はざる残暑かな
朝顔の蔓の行方にある自由

八月十五日 夏潮句会
盆の月満つるに余る夜の帳

稲の花かすめて白き風渡る
日本は農耕民族稲の花

昼は空渡りをるらん盆の月
八月十八日 北信越ホトギス俳句大会前日句会

撫子の咲いてそこより日本海
波音と入れ替りたる秋の蟬

こども又花野とのひつつありぬ
八月十九日 北信越ホトギス俳句大会

一滴の露も育たぬ快晴に
稔田となるも近しと見し旅路

八月二十日 アサヒカルチャー
一雨のほしいと思ふとき残暑

汗涼し昨日の旅路遠くして
新涼の旅路を偲ぶ家居かな

八月二十一日 有恒倶楽部

六甲の稲妻走る家路かな
かなかなの遠ざかる森あとにして

稲妻に近づきゆける帰路となり
稲妻に富士の方角ありにけり

蜘蛛の森に沈める山の荘
残暑には処する心のあることを

八月二十一日 無名会
新涼をまとへばそこが松林

新涼の風の木洩日身ほとりに
山幾つ越え来し日本海の秋

高台といふ新涼をさそふもの
秋風を纏へばそこに佇みて

新涼の旅のはじまる朝かな
八月二十四日 時雨会

雑踏に紛ることも踊の夜
秋早留守の部屋よりはじまりぬ

流星を見しかと問うてみることに
八月二十五日 ホトギス社吟行会

法師蟬零るる山の迫る句碑
六年の句碑の歳月女郎花

山門に新涼の風渡りけり
八月二十九日 「松の花」七百号

みのり田となりつつありぬ越の旅
新涼のこを通はれをられしと

露の世の震禍しのびてゐるばかり
又地震の話となりぬ露けしや

八月三十日 中越地震記念復興
震災の跡と聞くだに露けしや

秋草に彩られても悼みてをり
露草も悼む心に咲いてをり

崩壊の跡とや花野なせりけり

廣太郎句帳

廣太郎

平成十九年八月一日 一水会

片陰に吸ひ込まれゆく己が魂

八月二日 蕉心会

雨に日に嵐に地震に秋近し
君偲ぶ秋近づいて来りけり
大川の水より暮れて夜の秋
夏瘦をしたら付き合うてくれるか
秋近し今日は鷗のよく飛ぶ日
川風にビル風に秋近きとも
任せとくなはれタイガースの秋は
遊船の音と笑顔を運ぶ風

八月二十五日 野分会夏行

夏潮や玻璃一枚といふ俯瞰
明石海峡大橋に汗をさめ
松籟を遠ざけてゐる蟬時雨
橋といふ涼しき高さありにけり
羊の毛涼しく伸びてをりにけり
人歩く羊は走る蟬は鳴く
涼風に押され羊のダツシユかな
酔ひ醒めてゆくこの風にこの霧に

八月十六日 はせを句会

その先は三途の川原てふ網戸
冷房を一度下げるといふ馳走

八月九日 土筆会

川施餓鬼水は凶器となりけり
アツツ島サイパン島や施餓鬼船
日の雫赤のまんまとなりにけり
ポケットに子等の夢あり赤のまま
句碑生れてより里山の初秋に

八月十六日 登高会

初秋や撰氏四十度といふ日
星飛ぶや地震の列島見下して
鳳仙花紅より白の目立つ庭
新秋といふ言の葉に救はるる
星飛んで星飛んで星飛んで黙
八月十八日 北信越ホトギス同人会 大会

新涼や愛子柏翠虚子の道
秋の蟬虚子恋ふ如く鳴きにけり
タイガースファンといふ爽やかな顔

八月二十一日 草木瓜会

野面積てふ片陰の角度かな
底紅を咲かせ十六代城主
山荘の句碑を照らして星月夜
黒猫のぬつと顔出し木槿垣
木槿垣人に邂逅ありにけり
生るる星死ぬる星あり星月夜

八月二十二日 目黒学園句会

指先に星を引き寄せ踊かな
碧眼も阿波人となり踊りけり
大きめの羽寄せたる芙蓉かな

施餓鬼船遺骨取拾団の黙
醉芙蓉そろそろ行きつけの店へ
阿波踊手つき見られてをりにけり
川風に魂乗せて施餓鬼船

八月二十五日 ホトギス社吟行会

冷房の効く方へ椅子並べけり
富士よりの風に囃され法師蟬
壇上の白百合といふもてなしに
梨畑抜ければ句碑といふ出会ひ

八月二十七日 朝日カルチャー若草句会

大花火星引き寄せてをりにけり
新涼を発ち新涼へ二百キロ
摩天楼屋上といふ新涼に
ビルといふ新涼拒む壁であり

八月二十八日 若水句会

稲妻に夕日押されてをりにけり
稲妻に雲の変幻ありにけり
見えてくる風の形や芭蕉林
芭蕉葉に風は力を抜いてをり

八月二十九日 家族旅行、松島俳句ポスト投句

島巡りてふ遊船でありにけり
八月三十一日 夢三忌前夜句会
雨を発ち霧に着きたる一會かな

雑詠

廣太郎 選

虚子書翰掲げし花の弘秋居 大田 波多野弘秋
 虚子遺影祀りし花の弘秋居 同
 虚子遺墨守りし花の弘秋居 同
 百千鳥来よ象山は水清し 樞原 稲岡 長
 古き代の血の記号とし落椿 同
 落椿象山の間の暗きかな 同
 凍星の残るを仰ぎ喪の旅へ 相模原 木村享史
 喪の旅といふは一人や寒の月 同
 風花は天の驢出棺す 同
 貸切の貼紙のあり花の宿 神戸 千原叡子
 鶯は花より先に目覚めぬし 同
 宵が夜となるみ吉野を亀鳴ける 同
 一村や霧に押しつぶされて過疎 東村山 村松紅花
 猪垣の外に人住み猪も棲み 同
 霧進む一峰攻むる兵のごと 同
 子規虚子を偲ぶ上野の月朧 長岡 安原 葉
 花万朶吉野の旅も近づきし 同
 被災地の古屋がたがた涅槃西風 同

小城下の行事と崇め雛まつり たつの 浅井青陽子
 遠来の客も混りし雛流し 同
 濁流に俵雛の速きこと 同
 芹薺御形繁蓼よ手を挙げよ 大阪 薦 三郎
 董咲く世に三色を分担し 同
 表裏表表や落椿 同
 友次郎偲ぶ学び舎囀れる 東京 大久保白村
 よそ者を少し迷はせ路地のどか 同
 清洲橋新大橋や鳥雲に 同
 手鏡に雛の幸せ秘めらるる 福山 竹下陶子
 土を出し天道虫の日の粒に 同
 天帝をはなれ天道虫飛びぬ 同
 適当な目がつくづくし見つけをり 高松 岩瀬由美子
 過不足を整へてゆく芽立かな 同
 奥行をひつぱり出して椿咲く 同
 頑強な祖父の背なりし二日灸 神戸 山田弘子
 生きんとて子規もすゑたる二日灸 同
 陽炎を漕ぎ自転車の子が消えし 同
 瀬田ものと呼びて蜩の粒揃ひ 八尾 山下美典
 鳴き声で計れぬ高さ揚雲雀 同
 異国語で囲んでをりし花御堂 同
 交差点より啓蟄の人うごく 熊本 岩岡中正
 わが町もわが生も蠶る中に 同
 一すぢの野火より神話立ち上がる 同

雑詠句評（七月号より）

恵明・葉・静龍

眞理子・保佳・芳子

とほ歩・むつみ・中正

千鶴子・美奇・廣太郎

手にかろき春雨傘を選び来て 福岡 松尾緑富

春雨は、しつとりと暖かく降りつつんで草木を育む雨である。明るくて情こまやかな風趣もある。この句、「手にかろき」には気分が軽やかではずむびびきが有る。傘をさして出たことを楽しんでる感じがある。「選び来て」と、次に「つづく形」とめている。外に出てのいろいろのことは省略している。傘の内は明るい、期待通りの人にも会える。自然にも出合える。余情が広がっていく。どこまでも平明で明るい一句である。（恵明）

鬱陶しくもあるが、どこか明るい雰囲気もある「春雨」という季題は、やはりこれからどんどん暖かくなってくる季節にも関係があるだろう。雨具もそれ程重裝備にならないという事もこの季なちではものだろう。雨という鬱陶しさが、却って明るく伝わってくる。（廣太郎）

臨終の夫を看取りておぼろの夜 山形 西澤さち女

作者の夫君西澤破風師は、平成二十年三月十二日、八十四年の生涯を閉じ、急逝されたという。師は浄土宗の僧としてその使命を果たされ、伝統俳句の普及にも尽力された。ここに、ご生前のご功績と面影をお偲び申しあげるとともに、ご遺族並びに有縁の方々のお悲しみを拝察申しあげ、謹んで哀悼の意を表す。さて掲句は、季題に託して臨終の夫を看取っている作者の心情が詠まれた句で、近づく最期の別れを意識しながらなす術もない作者の万感の思いが季題の心持とともに伝わってくる。（葉）

平成二十年三月十二日に、東北ホトトギスの重鎮であらせられた西澤破風氏が亡くなられた。作者は申し上げるまでもなく奥様である。悲しみも一人であられるであろうが、敢えて事実を淡々と表現されたところに情が感じられる。そのお気持ちが季題に集約されていて格調高い句となっている。（廣太郎）

天地有情

花子選

咲きつづけ拾ひつづけし椿終ふ
 大阪 塙 告冬
 あすよりは椿の咲かぬ庭にたち
 同
 寒明けてよりの六甲嵐かな
 東京 稲畑廣太郎
 寒明や旅心とは里心
 同
 雛の間ふり向けば皆居らざりし
 長岡 安原 葉
 剪定や少し離れてもう一人
 同
 かりかりと空揚げかるき土筆の穂
 榎原 稲岡 長
 草餅の香や口中に緑なす
 同
 裏木戸に門のなし花の宿
 東京 山田閨子
 登りゆく人花に消え花に消え
 同
 その一句引いて講義し虚子忌かな
 神戸 三村純也
 記念館一人で訪うて虚子忌かな
 同
 紅梅に機微を極めし小鳥たち
 豊中 瀧 青佳
 人生は差し引き零の朧かな
 同
 つゞきたる音のたしかに落椿
 たつの 浅井青陽子
 犬ふぐりかたまり咲ける径が好き
 同
 東京の伏兵さくらそこここに
 東京 内藤呈念
 さの音のやさしき響きさくらさく
 同

宵の街ほつく濡らす花の雨
 同 今井千鶴子
 みよし野や別れの桜なぜ散らぬ
 同
 み吉野の宿は弥生の灯を点す
 八尾 岩垣子鹿
 春の雲あると思へば春の雲
 同
 初桜この荒天に咲かずとも
 神戸 山田弘子
 初桜一花の繋ぐ旅路はも
 同
 春灯下眠る吾子抱く妻ありて
 広島 山根正巳
 朧夜の瞬き淡き島明り
 同
 春埃拭うて閑な売子かな
 箕面 井上浩一郎
 森の径とだえ囀降るばかり
 同
 み仏の父母招き菊に酌む
 福山 竹下陶子
 紫陽花の紫匂ふ朝日かな
 同
 先の先見越し植林進みけり
 東京 橋本くに彦
 惚の芽や山知り尽す身ごしらへ
 同
 春光の一点として吾もゐる野
 熊本 岩岡中正
 春の鴨見て世に少し遅れたる
 同
 足重きことは言ふまじ山笑ふ
 徳島 上崎暮潮
 椿寿とはいかなる齡椿見る
 同

天地有情句評

汀子

あすよりは椿の咲かぬ庭にたち 大阪 塙 告冬

これまで毎日椿の花の咲いたり落ちたりしているのを見てきた

楽しみが終ってしまった作者の悲しみ。

寒明や旅心とは里心 東京 稲畑廣太郎

寒が明けて沸き上がってくる旅心。先ず故郷が懐かしい。

雛の間ふり向けば皆居らざりし 長岡 安原 葉

それほど雛に心を奪われていた。

かりかりと空揚げかろき土筆の穂 樞原 稲岡 長

空揚げの土筆と知った作者の興味。

登りゆく人花に消え花に消え 東京 山田閔子
満開の花の山ならではの情景。

その一句引いて講義し虚子忌かな 神戸 三村純也

虚子の一句を用いて講義するのも虚子忌ならではの授業。

人生は差し引き零の朧かな 豊中 瀧 青佳

嬉しいことも悲しいこともすべて朧であり、差引は零と思う作

者の人生観。

つゞきたる音のたしかに落椿 たつの 浅井青陽子

最初に驚いた落椿の音に続いた音はもう知っている落椿の音。

さの音のやさしき響きさくらさく 東京 内藤呈念

この句の中のさの魅力を桜に托す。

(以下略)